

113

845



君則序

孟子小欲ある君盡君道少なきは好ひま

初の初とりの舜行人也我行人也

者亦如是とらひりて人君志の道と

一はらひるまの好ら則ありて

ありん事其則遠小非と布て方策

見くその好らふ古れ教とるその初

可ひくその好らふと人を知りて其

なる理我身子信らまると思はる古

信せらるる其起れ心を生かす



我國の

先君芳烈公の希代の明君也而字と字の
信しおひ仰りしとて後々乃の所勅積りし
クひく仁義の原と明く先考の道と
其所家は法りしとて所を政し
しとて字同の所方りしとて
而字と字を所りしとて所躬りし
君のしとてしとてしとてしとて
り行のしとてしとてしとてしとて
唐ふと大如しとてしとてしとて
人の君と公と則しとてしとてしとて

あーおひのしとてしとてしとてしとて

公は官のしとてしとてしとてしとて

有る者も亦其の

公を我々の先君あり

人の君是と則ちとてしとてしとて

公は官のしとてしとてしとてしとて

公は官のしとてしとてしとてしとて

公は官のしとてしとてしとてしとて

君則卷一

上老光ら民興考

大孝

上小居は少人その父母ははくうふ其年
考ひのくるをなすうらと厚く〜の老る
人とならひのよ道とあり〜は〜その下れ
民上のり〜と侍〜と〜神と考ひ所
奥〜一國じつまき風俗やぬ手を
その人君の考あちう〜あるのな〜ひのよ
考〜うらふ那中〜人君の考と信り
考の〜人れ心と考〜考ふ基をその
考小考〜考あ〜を〜を〜

天正十三年二月
花房仙文郎氏寄贈

一 公の 所母堂様よりぬきあてり庭より松を植む
身遊子より病氣入り下り度々枯れぬ
公内所不鋤をひてりぬき通し植む又
或時 所母堂様枝箱おのぬき入るに後
身物方由り 行ひぬ 公早速常と
所真似遊子同子と遊む其時 信儀も後
身成り方感ひ遊む一歳 所母堂様より
下り遊むにたふさぬか半くあてりぬき
公以て外書物せりし所暇に
所母堂様よりぬき遊むは官に
國を領する身は親のしりぬき事しぬき

ちかむのまあしぬき遊むを交ぬりぬき
ぬきぬきぬき 仁多し又或時 所母堂様の
所よりぬき遊むと刻まぬぬき事しぬき

體君羣臣 中庸

群臣多くけ下りぬき其下の群臣
所の上りぬき遊むは親のしりぬき事しぬき
各不遊むぬき遊むは親のしりぬき事しぬき
所身を心け下りぬき遊むは親のしりぬき事しぬき
各不遊むぬき遊むは親のしりぬき事しぬき
事しぬき遊むは親のしりぬき事しぬき
知りぬき遊むは親のしりぬき事しぬき

一 或時江戶山下向の折物揚羽の宿屋に下宿す
多々の居海より遊覧すしして御所収樂を
くく山内控屋敷 山前へ出遊するに機屋行
り宿屋平生ありしとてあはれ今も風景は
し相成りし思惟ありしとて同古事
毎も思ひきて遊覧すしして心不勇くんと
思ふよし新一人お付く大塚の者在遠路と旅
安親子兄弟事あり等に悲時別れと懐
又ふ小成者去行慮りあはれ事あり
彼是を不便事也とて行かぬ可し
る去らるる事あり自然と又常事帰る

も子供の人々皆居候なり力分りて
所安駕小き皆義心懐度し格別勇下
志けり也

視民如傷

孟子

國政の可憂し民の窮行と痛あり
あはれ各あはれのみし居る
目らるるを民の可憂し
あつて世痛なる事多あり
君れ可也

一 内閣居に西丸あり病中子宿早嘗れ

時分の交 仁と 伊豫守様取 可成共
被仰付早速所度申放さ給おれを其取
所後申す所不審ある其其故を
百姓の方へ申す當の處よ不申さ 所意

寛則得衆 論語

一 堪忍はく入ればくを智の徳の
大主の是もあわい人多く帰服して懐き
下民上た思ら侍へ成く用の為る事
おはすし旗が竹果り相伴之言はけの書
紙は口包彼
之旗がけつと用今朝二れけあてらもなま

やみさし 仁被り信はし役人とも
しけのまら書と申出た力
しるはらつて針あつて役人の
あはつていふ所役人官の
と入る信あつたわらう
しせられしと信申す
はらす私事も先年か核の
ま被執福を被頭カ好せられ
侍りしや相果りし
是今のしと物方す
むしは方とあり 落席は

とわいふ存心りきり事也其の其の其の
し料理方よりありて二三人ありては
酒分余入られしものも我に給物
かりんといふ所のの控の盛りの候に
爰より取りつりしものありては
盡を其其供のり候ものも我に給物
可らば其の王也我に心たせしもの
我に給物に候感に候ものも

制節謹度 孝經

節の程ありては法或る人國を領
はる財寶之をふあはれ法事の入目

昔の程く入目と云らるるは法式とも
其の官旅相意の格より給りては仁政其
一 ほうり世役なりし時 信儀より候見
し事候もいふことありては
中より候後よりいふに権臣事なり
中心地より入相よりいふに早下通
ともいふに権臣事なり相得中
一人もいふに候事なり見ゆ
仁事なり候事なり候事なり
公宣り我事候事なり
誰か天幕織のから候事なり

1 何れか一あるをさきむ行志しては極とせし
 意いふもさうなりなり（かたは後よりの代り也）
 1 行方出む時ふもあしむもあしむ處は細魚一
 垣をさ務まむ 仁らる小は事しを早く致垂
 けりし浮ち際とて貴は仕言也行れ切に枯に
 格の十程あする新表あとするまふ非ありさ
 1 公常小権子にはむの事あしむ御まると上野都
 上道郡の自見房多波し舞散り側とすり
 1 河城の後もあし揚ふもり有るしあも言む仁り
 り懸しも不懸りともと 公それ懸あもす候
 先大合の田地を貴し人力と若く先予も又大屋の

1 心をあけては出るせは然れども未あはたる
 1 樂よふなりしとては益ありぬれり
 1 ぬ是心は休し行なふ可なり休なふ可なり
 1 休田圃の徳生さると見ると半年さうに
 1 するあしむ 川まらるとも神鳥飼ふ
 1 一つ不遊ふと云前ふは始初る味も藩の
 1 中あまの身なすしうんのはれも藩さ
 1 とたふ樂あはるしあ持く
 1 敬事の時信 偏語
 1 人主の一事をとる計ひりやとても念を入
 1 ち切しして道ふまらぬ極あり其

方針はゆるゆるの信うとあれは定格をく
崩さざる事最密なりとは方能行なりと

一 或時ゆる行方所動はちきりなる所世能
出「氣」其長雨降しを洪玉氣ありあり
の所書は地月す多程やと行何しと時を今
換へますや 行なりとつと斗あり所行書
おきぬ料曾対見しは地は危南坊明ぬ
有系 門前へ所書先刻 所さして何事も
おき程ふらう向仕るは在合息仕るを
と有るいとはる所通しとよらるる所と

所書しとれ今來れ雨天か村羽の不出しとて
時又り所の通ぬれぬ所の所書もちるを
氣をゆるめ仕をさうしとてあやや 行なりと
とてか感せぬ人しとるるさ

道同字 中庸

道由文字のし也同字の字同さちさし
智心と度く物に理と精く辨玉致れ
道しとてとぬ極しとるはとある字同
ちとらた事とちとらぬ就しとて 道同字
とて人の主の要務也

一 公同年十四子多る所時或夜とらはしと寝

成りふるを聖朝の側の大伺所機を以て
いしてあり寝成りたるはしり事りし
別の事ありしあり我之國を領して己小十歳
おれを為して丁信と云ふ今得る事ありし
極く高くとほり見りし由を信し疑ひなく
一是亦字同の思ふ所なり家初也

知命 論語

命を天命也人己の成るを以て
此事ありし猶を以て為れ復しは

水の政道ふるまふまあるは水損早換は
ありしを亦換はれ変生する是天命と
ありて命なりしとありし人力ありて
何しあり驚き懼るは非ず此時あり
るも慎んで天命するを知命と云人
下民の目當ふるまふ所ありし天命の
ありしありしありし懼るは非ず
深く慎んで天命するを金なりし
なりし

一 或時播別共庫に仲ありし解神風あり
は法の上不覺悟を極めけりし時亦亦行

存後を重なるる。諸事を取計の務骨幸力
らあ計の血眼に如くり知されは友軍と
らて死す命をとり死傷よりを恨むる如
あはれ心を平しとて初す命と。其あは
友軍の如く死す命をとり死傷よりを恨むる如
忽ち心一力を得首の賞とする如ありと
ほふ友軍の如く死す命と。公は素志と
其あはれ心を平しとて初す命と。其あは
友軍の如く死す命をとり死傷よりを恨むる如
忽ち心一力を得首の賞とする如ありと
ほふ友軍の如く死す命と。公は素志と

たふふ力と得るをりせしり。其あはれ心を平しとて初す命と。其あは
友軍の如く死す命をとり死傷よりを恨むる如
忽ち心一力を得首の賞とする如ありと
ほふ友軍の如く死す命と。公は素志と

其あはれ心を平しとて初す命と。其あは
友軍の如く死す命をとり死傷よりを恨むる如
忽ち心一力を得首の賞とする如ありと
ほふ友軍の如く死す命と。公は素志と

其あはれ心を平しとて初す命と。其あは
友軍の如く死す命をとり死傷よりを恨むる如
忽ち心一力を得首の賞とする如ありと
ほふ友軍の如く死す命と。公は素志と

其あはれ心を平しとて初す命と。其あは
友軍の如く死す命をとり死傷よりを恨むる如
忽ち心一力を得首の賞とする如ありと
ほふ友軍の如く死す命と。公は素志と

一

不問法あり今日れ花が事なきはらふ運其を
しやる夜の通くこの調法とは是れ非のなる 教條の
所也と猶も今日の仕合所極極の極とも入るる
同の竹の所務やせなること可多致あふよもて
別まの聖旨を立之り極極の頼り時所家物と
は極けるの事方へ多る向付た所他の所也之を
る入るる極をすりしり所極極とたなきはらふ
教条しと云ことり睨るる其方た即極の事行
り極けること 仰けるも中々左極ありは極
り極しと云れ之を難き也あれは後極也と云ふ

終りては愈々後併役あり極もすりしり
之を極の其役り非きを竹か馬先少て用
まじりて極あるるは極古ありは極筒先少
玉の極もせし彼も未をり物り行するは竹巧物
ありしよの所意や之を感りしり之も早速
之を極方行りしり之を極散り所此を蒙り
しり之を極ありて志りしり之を極少り
之を極感極ししせひけるも也

官不及私眠惟其能 書經

私眠と云ふ上の語も思ひ極ふ人といは役も
り之極行り故も極も思ひ極ふ人といは役も

一 記少く役者を命し給ふる事非ず危角其
用よりなき事ある人より用ゆる事也
於上様所乳足弟の事何れを先歩行する
お上様より役人中より頼み対は後
の節は書上あり被と事加よるは是と
下呼おとて幾度書上ても被とを
お上様所存生の田は事不
の事よとて所遊去後まの事よれ
るおとと是こと了事おと
後を六の乳足弟く文は
頼むとてのありて度は書おとれた田
お上様より

事と用ひて仕番ふ言さるる不
早六も果し被一生心
甚だしく然心か
所よりさるる人の事
所よりさるる人の事
所よりさるる人の事

右則を二終

君則卷二

臨大節而不可奪

大節と云ふ一命に危なき場を以て此心を高位厚祿
 と交けしよふ居居ふ人其重なりよ其人忠誠
 あり二心あり假令若其事に持ふ其人一危
 難の事あれば一命をとりてそれとて復し
 其義に心邪くを奪つて妨げをあたふを
 以て國を領し持ふ所は此忠義ありて此
 子孫長えし由家と持ふを信ふるを
 公方極日光 所社奉の清田を新り竹まの目
 信付了然所と少信付れ所中へ入れは 信分れ

外極のたる極小のた 公と入れおる守は
信守の也所之家と守の公人へさうさくあ〜〜ち
さく由汝人へねる尾の官やと右入れたる公
公と守の心は報めく第一る心のも有る時守の
下犯さくわの家と守一とのも事ありとせ
一由井の第一乱れ時 汝方極所用りれ挑極の
四の蝶の所致高挑極の柄と珍とはめさく又拾尾
口切と〜〜挑へり挑極を不審おめり
け方極へ来り汝ら所能く論をばめさく挑極
又拾尾所行口切と〜〜挑へり挑極を不審おめり
〜〜り所用方おも驚き早〜〜言〜〜

須行膳中少〜〜其言と同らと者も或量
出たひ馬〜〜宣〜〜當書〜〜と案おれ別〜
了合ふ人〜〜所依〜〜月番の所た中〜〜下
幾り目録に 信入るれ〜〜今所用り〜〜居〜〜今
廿四侍下〜〜名らに〜〜〜〜意〜〜用り〜〜意
了〜〜所 仰入〜〜有直〜〜あ〜〜時 是今也世
も〜〜自分らと借り 是形の挑極口切〜〜
尸付ら所〜〜害の事〜〜汝ら所論議〜〜と〜〜大
出〜〜下〜〜信守 信守の心は報めく第一る心のも有る時守の
さく由汝人へねる尾の官やと右入れたる公
公と守の心は報めく第一る心のも有る時守の
下犯さくわの家と守一とのも事ありとせ
一由井の第一乱れ時 汝方極所用りれ挑極の
四の蝶の所致高挑極の柄と珍とはめさく又拾尾
口切と〜〜挑へり挑極を不審おめり
け方極へ来り汝ら所能く論をばめさく挑極
又拾尾所行口切と〜〜挑へり挑極を不審おめり
〜〜り所用方おも驚き早〜〜言〜〜

行ありなり

教小過

論信

小過より程き不測法と云う測法と云ふはさう同
俗に言ふあり入り人の吾一もふあるものとす
ゆは教と云ふの如くもわたり程に不測法
おれ情態の心を以てゆるし給ふ國民
帰服せんぬくあはれを云

一 或士より田場より教生所と云ふ鳥見のとき
逢 山耳もわりの行のあはれと云う尋ね時
留れのゆゑもあはれとのあはれと云う言ふ上は
之五る計けらるるよすうふて紛交物かた能

吟味して中とよと云ふ 仰其取所側のみよ
方 何対らるれをサ 脇へ方ら建させ
聖旨自ら見ると系吟味しては鳥と持
所れの如く物事を所れたまふ助りのあは
遠ひよりいふあるものよさあはれと云う
吟味されたるより誰も知りてはるる新に
非と際し上れしれたまふかり事を藤末
如るの事より能く吟味して中とよと云ふ
まうてはるる

議獄緩死

易經

獄と新証の事と決心を悔証と云ふ

悪利口はまの方々を理を非ぶまげく直成方と
害すも不悔仁のより道か一許後を加へ入れ
命一度絶てて再び継事なりぬおあわん
死罪極りたるあ見ゆか罪人とも甚と教
申をさらけたるは後と云くもては教一
行あるは理あり極りたるあて教り
よあ是るあわ仁道了とげからる
一 西崎門側 伊豫守振侍方 行ひけるは田舎
屋敷か 伊豫守振侍方 伊豫守振侍
給ひし方をもせりしや 此處をわら吉事
よりとれぬ 頼りたるは 伊豫守門側

もを行由後とて返てあ平小洪と死刑の旨
作付ぬ 一 伊豫守門側 一 伊豫守門側
返りてしはわかれ 大寺のついで年先
あ吉事 伊豫守門側 一 伊豫守門側
か 伊豫守教の身の傍に 行由後と云
それ 伊豫守門側 伊豫守門側 伊豫守門側
あ 伊豫守門側 伊豫守門側 伊豫守門側
あ 伊豫守門側 伊豫守門側 伊豫守門側
殿も若く其方も 伊豫守門側 伊豫守門側
殺すれとて 伊豫守門側 伊豫守門側

賞一おろく之借由なりしり富をくくく其の
公其直言を多稱するなり其の行は馬鹿
くしんか世に信然り也一信然りとくしん
人信の彼自己の利を思ふなり是れ其の
あつて由家のものなり其れを志しきなり
遠^ち侮人^ち 論語
侮人^ちをいふは建誠は心ちありて言ひする
所を偽りて人々を喜ばん人々の福をせしむる
求むらふし一かくしりふらふも人の心を
偽らぬなりし一く上の能なりけり信然り
ありて官禄一進歩し其のくく其れ

あふたむたまひしり富一夫きふはあり一
かゝるありて君の侍なりと親なるも其の
ありての侮人^ちなりしりふらふも人の心を
偽らぬなりし一く上の能なりけり信然り
ありて官禄一進歩し其のくく其れ
思ふありて人君のよありて古今多く其
のくく其のひひて人君を仕へたりしり
その忠誠はありて其れを志しきなり
君又其富ありて其れを志しきなり
るなり行ありて其れを志しきなり
あり人々を喜ばんとく其れを志しきなり
是れ其のくく其れを志しきなり

強敵の首を斬るは信り膏を弄す。一は一とあるは、
一は一とあるは、
一は一とあるは、

反取脩徳

易經

人之其身の上ありては水換り損の天変は、
又き人民叛逆の世を、
人を習えりよ、
政の理は、
慎を戒りて

一送意三〇

送意三〇の頃、
若狭少将一守上夜、
是と、
又天乃時あり、
改と、

賢と

論語

賢と其所は善なる理ありては、

その事も亦一書に道徳傳りてありき
人よ復と任一信に信人其人を二平とて
凡俗も善くする所根根の心奪くして法令能
行つるは國政の正を能く根も才とて或を
後役の勤向功を或は威能を上平とて或を
是を月ひくはれこの職一重信に正用向
信ありその業も人目と勤するは其も多
くわいふの威も是れ執力能くありて地中の
悔りと交りあり人主と信あり人と其も
人より捨重おつるは必り之を其役を任一
其職と勤一正に任りてあり

一 公村所代も亦其書に善松市郎忠房奇友加是此等
二人と大坂七中陰の切といふ孫二の解完賜り
多らむ其市郎と市郎忠房も人々屋敷に二百市町あり
内蔵所あり其書に信ありてありて女は信ありて彼
可くありて古銭形とて守りて宣いて所入き物
山脈の系は祖或切も故といふの右のり同山脈一統
之白人とてその孫と信りて一ありて百市町あり
右丹波の楊井信りて孫ありて島原一統の切
といふ自らも右の信物も其書に能くあり
又右田尾の信今西利とて其書に信ありて
皆武義といふ自らも信ありて子の右信信村と

能く強う一寸二歩と村より也。後苑の上子、花柳
の邊、御司を馬の梶田より公命り、道地権、中村
多の邊、鎧の飯多、利権、今、皆、勤、建、く、此、勤、馬
か、後、出、羽、ち、女、の、見、山、性、あ、て、初、年、の、後、所、右、入、れ、所
、子、物、を、受、め、し、て、勝、れ、し、る、よ、り、也、依、之、出、羽、ち、女
、し、り、の、野、う、ら、ち、初、術、の、よ、り、之、由、行、は、馬、鹿、の
、市、森、彦、三、郎、公、命、の、勤、馬、門、邊、を、馬、軍、守、の、
、上、泉、治、部、也、山、田、道、権、白、田、甚、之、出、く、山、本、喜、公
、大、傳、あ、く、筆、道、と、能、者、勝、れ、く、勇、力、格、豪、傑、乃
、也、後、字、授、れ、し、も、行、を、命、り、給、よ、り、此、右、左、
、教、守、各、武、切、技、藝、文、才、方、故、を、の、く、多、く、の

會福を賜りらむとあり

一 傳曰重治命士上七の比あやむ情あし居りしふ
公今の時計と行時とあしむるやと問と答ふ重治取
唯今寐入りてももむと云ふ 公黙りたり
夜明く重治命の方をまけんとし居りて事を
あすぬれ男也とけむとあり 十分を以て
大目付のむら 仁分ける

忠信重祿 中庸

君よりふ居らひて尊く位にふ居て
あられ自然の遊をありあし
君視匠如手足是は視君如腹心と云ふ

君らも信とてを——賜るる所可深くは世に信り
をを愛し——も深のぬい信情は自然の
執りあまの人の信下と今も教はるる信を
心をもあし——親し——も由の身下可後と
ま——七骨折も信を——も其縁を——
固く行ふ方らぬ振り——信り——も又出を
信らるる也

一 山に重なる處へ高きよはまやての信り——も其縁を
——も其縁を——も其縁を——も其縁を
はら五段せう——も其縁を——も其縁を
信らるる——も其縁を——も其縁を

小判亦兩紙の信包其よ小判並指あやし書有
多し——も其縁を——も其縁を——も其縁を
お——も其縁を——も其縁を——も其縁を
一七持を——も其縁を——も其縁を——も其縁を
家におい行書も信り——も其縁を——も其縁を
める信り。教り——も其縁を——も其縁を——も其縁を
はら五段せう——も其縁を——も其縁を——も其縁を
そねら書有るは合し——も其縁を——も其縁を——も其縁を
一七持を——も其縁を——も其縁を——も其縁を
け

右圖卷二終

君則卷之二

刑干寡妻至于兄弟御干家邦 詩經
述周乃文王之序史婦則四の法法の
と習うて仍まう侍と寡妻と文王の内室也
御と治しとや字の心也史詩の心と周文王の
内室とを教はるる事とて法とて治とて其
のまは法武は兄弟のまはるるも行もるる
と親族一統と項ありと其通人の手也と
めつと能其家と邦をも治るるの心也
んともりと所と備の家と治るるの法とて其

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

君躬も行ひしにや、
公の教を以て、
先其の身より、
わづらひまを、
しりあはれ、
公の教を、
和らげ、
乾乾自強不息
易經
人のまを、

あく人は、
しりあはれ、
わづらひまを、
しりあはれ、
公の教を、
和らげ、
乾乾自強不息

一
公の復箱の蓋、
自棄與世與言、
不益進、
是古殷の湯王、
あく人は、

公の思ふ人の心は由緒ありありと平に思ふ
物に戒少ありと強し重て朝夕法を
て心を付ゆりせらるれりありありなり
多る思ふ殿の湯に昔を学ひのりや
りし視箱の書し我の言葉書を雅にけし
懈心一生自暴自棄と云ひ法思録し
云葉く自暴自棄と云ひ義をも用して
常しある法ありなる事年とするも也自棄
と云ひ仁義の道ありと云ひを可憐弱めて
仁義を用ゆるありと云ひを可憐弱めて
ありと云ひ世を思ふありと云ひ世の事あり

ありと云ひ由緒ありありと平に思ふ
其の心自暴自棄の事ありと云ひ
懈心一生自暴自棄と云ひ法思録し
ありと云ひ世を思ふありと云ひ世の事あり
ありと云ひ由緒ありありと平に思ふ
世に統御を委ねしありと云ひ世の事あり
修りの陣の地を論じて行く心を與世與言
不益進よめありと云ひ世の事あり
人、徳ありと云ひありと云ひ世の事あり
ありと云ひ世の事ありと云ひ世の事あり
人ありと云ひありと云ひ世の事あり

それ故に一國代するに於て徳行の備はるる
ありしと奉世毀の憂ひありしなり
公の徳行はあまはるる也
一とん務とにたれど
一とん徳行はあまはるる也
一とん徳行はあまはるる也
一とん徳行はあまはるる也
一とん徳行はあまはるる也

政者正也帥以正孰敢不正 論語

政者正也帥以正孰敢不正
此の政とあるは國中の人共正なるべし
とて正しく仕るべし
とて正しく仕るべし
とて正しく仕るべし
とて正しく仕るべし
とて正しく仕るべし

一 西所丸の序 時よくまら 或時つひと厚き所

庭より依ありて口を以て使問るを鴨と持持を獲てか
ぬといふ慰とすよれは清守もきて遊をこりかた
は度場 伊豫殿を許きて我亦自由あら
ぬ少くも意多様とせん大守あり。 所中丸出
まじくの限りと 所前あり心付るも私を心付
一丁とれ不念無事より方ありてよれは遊より後方と
う使とありて所今迄りの海あり遊とぬり持平
方遊作よりと 所進亦とりぬ言ありてり持をむ
こはな文ありてり對旅の名しきこり持を獲おる
り遊殿に 所とるれは遊入り方あり遊り遊の事
中のみよ直り家より事とるおのり遊の事

とれをむおこり持平物と

惟本從繩則正后從諫則聖

書經

此心とありてりお行極むとありてりよ書今ふ
はあふ時純をりて遊とありてり遊とありてり
真直より人む書より所身も事とるゆありて
るこく其所所せりけりあやとありてり遊とあり
諫と能用ひてりありてり遊とありてり遊とあり
明とありてりありてり遊とあり

一 或は清守の軍学のありしとる 所遊の信
用とありてり時法事より遊とありてり遊とあり
あも清守自ら極分とり持をむ或時伊は長く

う仕仕いふも結構ふ毎當を個人両者と扱お察
う休の時業あり ころのし標射し事ゆは所
幕もなり廿のころふし言飯多らとせつ幕布
辨多由とふれし 時を移しぬし待るに後
ふを長しは後をる酒肴と進じまてし例と
福を又の前しつ終るは後もいふなりしつて
ゆらゆら書ふ思るおもを思て美し
は世世とあしく國を御具しふよに心
標始損直ししる 城は城七つを多る前
今日の彼方い定し ともをいけらあともあは標始
ふる機始ふしる 何れ長しつらし 標始始せ

ふふのうたのたきい治あく下上とを 所前の
思ふふあつ形度もぬし大なる標射し行事
あつらふのしるし くらむの老角鳥家と
しつらふ平し子標射しとさつと標射と心懸は
了るのせとす 何れしつらふとす
二月十日をいふともいふに治せし目の見入りゆら
所前ふし標射の始とすしつらふの事とす
あはれふとすふふとすふふとすふふとす
おこしとすふふとすふふとすふふとす
不使大臣然乎不以 論結
以を用の字しゆ也世世とす福を食してす

家言はついで其の事ある者ありてあはれおぼ
 穢し任し用ひりしものありし協ひ給ふ
 めりしありて或はまじき言ひ給ふ
 用ひりし言ひの穢を任して用ひ給ふ
 相ありし言ひよと悲しむる言ひ給ふ
 人言ちし杖柱く人言と然し其の國の勢
 ありしや

一 公にうへに交駕二三日前の故き伊女中
 交はりし言ひの穢を任して用ひ給ふ
 一 公にうへに交駕二三日前の故き伊女中
 交はりし言ひの穢を任して用ひ給ふ
 一 公にうへに交駕二三日前の故き伊女中
 交はりし言ひの穢を任して用ひ給ふ

中あつた言ひの穢を任して用ひ給ふ
 一 公にうへに交駕二三日前の故き伊女中
 交はりし言ひの穢を任して用ひ給ふ
 一 公にうへに交駕二三日前の故き伊女中
 交はりし言ひの穢を任して用ひ給ふ
 一 公にうへに交駕二三日前の故き伊女中
 交はりし言ひの穢を任して用ひ給ふ
 一 公にうへに交駕二三日前の故き伊女中
 交はりし言ひの穢を任して用ひ給ふ
 一 公にうへに交駕二三日前の故き伊女中
 交はりし言ひの穢を任して用ひ給ふ

あり又或は徳代りて且古命と柳海傳
兼合と云はるるも是也唯今四海程は信を
え鷹の家のもほ沈して我友多あり
まれとて其もたるとはよき重まりは後と
あまりの世ありあつたは信をわはる人
細き山意加して感徳をほくか
行有るを得反求於己 愚子

此心多我人へ信じらる事にはまゝあはれ
くと怨むる人への心も君子は我人へまじは
まじのまゝにあつた時がまぬりて己身
宜しあつた事ある人へまじはるる自んて

それを受ひて人への國を信らるるは其
信なるは道のとてりとも信らるるはまよひ非と
りの心とのほど度はまじはるるは非あり
ある由は極まりあつた故は其所は非は
あつたと事や改る事ありあつた

一
公の徳は時常の信をけるは徳なりと云
信は徳初より民の徳行をて自んて金に
よらるる人の信はまじのあつた固くはわれ
人への非多と犯刑罰はかまもあつたあ
そつと徳をよめしとてし初をわけて
つひはつたよき人へと信じて初くはわれ

伊豫子孫 信慮を極めも勿論也。行儀は人の徳を
事しし方の一町中を家塾一所の徳を人君
乃其海ありし

菲^{ウラ}飲食^{ウラ}而致^{ウラ}孝^{ウラ}乎鬼神^{ウラ}惡^{ウラ}衣服^{ウラ}而致^{ウラ}義^{ウラ}乎
黻^{ウラ}冕^{ウラ}早^{ウラ}宮室^{ウラ}而盡^{ウラ}力^{ウラ}乎溝洫^{ウラ} 論語
是孔子禹を以て一徳と稱し行儀
亦初之菲を爲し字の也鬼神を先祖神
靈と云菲飲食を致孝乎鬼神は禹その
所成れよの飲食を致孝乎鬼神とて
是先祖を以て孝と云るに同澤なり信慮極
し行儀極めざるを極と云ふは孔子深きと

子散冕と云る禮有時は至用を以て装束也
惡^{ウラ}衣服^{ウラ}而致^{ウラ}美^{ウラ}乎散冕と云る禹亦其よの
類より廉潔よりて重なること行儀の
時の装束を以て美を以て威儀を以て
行儀を以て宮室と云る家居也溝洫は田地
の水利也水は川の早宮室は早く早く
と云る禹其亦其の行儀も家居も早く
速行のして田地の水利の備へ善法を
念を入給ひて五穀は熟しむる所も其よ
禹の亦其の亦身一分のよも其よ其よ
儉物を守り給ひて失墜なきを極めて

或は先祖たり或は人獲り威儀又と典業
のりある念を入りて其隆と威い給り申
た下り富と名りしりつとも其所以樂と志
給ふ心あり君たる職一心をあらし給り申
貴しりありはや人主の所成此を別と名給り
心を治めりし事行へ道よあり申や
一 公常小念織の所給を古給ひ是と名給
給り時思ひし申あり板の行行は紙捨を門
こらふ所側のもの命して掛りて給り申業の
ち蒲団の数年一なるけり山一主はは給
とせし。りともきふ此す先給の事あり

又仰く又年をゆて垢付け進のき節屋のまて
何とも申す給りける衣服是物人形此給
けり申や公常小用は給りしり有給り申業
あり象牙のしるし給りしり有給り申業
銀の小七と入り給り今い団合は庫は給り
はらあり金の蝶は附りしと持せりしり
杖箱を申す。其給の衣類を入るは給り
持せり行列の先はまきしり有給り申業
とも申し又申七刀も。其給の物也婦人け給り申
はらありしり有給りしり有給り申業
必社服をらるせりし女給り。其給をいり

乃若於中一洋文門前の屋敷小居るも此門の
前より山心より坊よりあるのみ 敷帳の物手觀世
少るもその袖と切く結ひ付せたりぬら
東照宮の門家を造営せられ如言ふ事
所先祖様此門墓と造りせりよの事今言
信守坊より此邦國中堤防の經營殊り力あり
とる是れ徳以助成の教と交り坊よりて表
事也

君則也を三終

君則卷四

仁人之於弟也親之欲其貴也愛之欲其
富也 孟子

此心仁徳ある人其弟とをこゝらひ給ふに親の
の厚きを亦その如く其弟に官位を授けあはしむ
らば思ひこころりの厚きを亦その如く其弟
に財宝を豊かにし奉をらせらば思ひこころし
しを亦其親の遺體を乞けて銘の所と
するも亦その如く其弟も亦その如く其弟を
一は其心も亦その如く其弟も亦その如く其弟を
たすは亦その如く其弟も亦その如く其弟を

人ありては兄弟の道厚のよしんまては
賤しきも兄弟の親しきも
友位財實の心は傳ふ人言ふは
幼室我れはまなれは兄弟と親し
其人を言位もも免れは
事といふはあつては
いふも増て兄弟相親し
回れあつては俗の言
其所身は道といふは
人を道守はるは

一 慶安二年

備後守秋河内道

城守は
上意其しは
備後守は
公は
上意は
國は
あつては
不
呼
了

新吉原

新吉原

易代の凶凶れあり 松平新左衛門より記す少将

と云ふ書をもる可き遊りたるなりと云ふ也

一 所へ採りて生れ侍るは年等々也中た 所へ採りて

と云ふ物一なるを採らる所望の初め初めと云ふ也

と云ふ物一なるを採らる所望の初め初めと云ふ也

一 所平生易れ強の卦に辞を以て後一と云ふ也

辞ありと云く

天道虧^テ盈^リ而益^シ謙^ニ地道變^テ盈^リ而流^シ謙^ニ鬼神

害^シ盈^リ而福^シ謙^ニ人道惡^シ盈^リ而好^シ謙^ニ

好^シ察^ス通^ス言^フ 中庸 是れ孔子辭の清徳を物一採りて謂く通言

と云ふ清きもの初也此心冬人採る可なり

と云ふ事をもつては心を向く可なり人の

と云ふ清きもの初也此心冬人採る可なり

と云ふ事をもつては心を向く可なり人の

と云ふ清きもの初也此心冬人採る可なり

と云ふ事をもつては心を向く可なり人の

と云ふ清きもの初也此心冬人採る可なり

と云ふ事をもつては心を向く可なり人の

と云ふ清きもの初也此心冬人採る可なり

と云ふ事をもつては心を向く可なり人の

と云ふ清きもの初也此心冬人採る可なり

と云ふ事をもつては心を向く可なり人の

と云ふ清きもの初也此心冬人採る可なり

と云ふ事をもつては心を向く可なり人の

と云ふ清きもの初也此心冬人採る可なり

うしを用人にたす才智を人よむん
けし極よあれい舞いしとよよまにい
け者あも追後粒尾をりあましくなる
慎このあゆみ

一 ちかき菓子蜜柑を食 ちかき側醫問塩見
玄之Pとらるる夜中冷物とけり用捨
Pとらるる昂清いあまき物とて奥
け後ろにありあまき事のとけり桂
官のけりけり年寄の女中清造は出
是を父信とれい極ゆるしよとよ
ちかきけりけりあまき事のとけり桂

然るも神あも又極の事を知りて侍りぬを
けりあまき事のとけり桂
ちかきけりけり年寄の女中清造は出
是を父信とれい極ゆるしよとよ
け後ろにありあまき事のとけり桂
官のけりけり年寄の女中清造は出
是を父信とれい極ゆるしよとよ

用徳彰其善 書經

此心多入主其下道死百受事と口擲て
或を考ん忠義のふ或は家業と能務ら
又多才病子長しとあわ其め

物重なるは感あることあり世恩惠と承て之を
あるべきとありて也一統子か程ある
こと知られず一統子か程ある
人への政あれは人への善は進んで業を属する
四民のありしをあるし中一を然と

一 公役任付するは備前備中備後の方より善人
撰ひりしと之の所存あることなり備中備前
乃内業ありのまふ事と賞うはあり尋常あり
是をとり制出くはさして是の天氏にとりて
彼ら額をとり手といはれりせははしり義とありて
則ち仍りまはる田租の極まりて永く年貢と受し

はしり感の所判物を賜ふ常はしり後約教ありて
ちと貴し一民をあることありの如しはしり
道中白濁ありては一人はれは合めは其は唾ら
たしりぬぬと奉りては考也 公役任付は感
不度鳥目を曾文とありては其後しり通行は
はしり事ありては目とありては常はしり入の
しりしりしりしり

一 或時学校へしり入給物ありては其年より一人は
の存ありてはしりしりしりしりしりしりしり
善人ありてはしりしりしりしりしりしりしり
しりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

一 所後教の節に送る部能仁のとも出たり或日
講書のとも指合し徳用のとも其書よりあり
お世の行事も教所つれおまきりしは和國書
なるる所後教お世のて而中も徒然なり
らぬ所なりし行事の力散海なるは其の
所書に對し布教玄物字而首章と後し
その後くは所海にたれはわこしは所なりと
一 教の行事なるは心懸る能信のや所なり
直子に回曉る料理なり也
謹^ラ序序之教^ラ申^ス之^ニ以^テ存^ス身^ノ之^義 子孟子
序序とるは中の子同也云此に也國を序るは

教を施と云り一也と云くは施のいなり其民
れ行ふ事なくとも学文所を建てるは可なり
一 して入るは手におぬる事と云くは師也
その入るは侍ある字文の師なり孔子は其の
志して其の志れは其の志と親を志しては其の
兄小なり順の道とありしと云くはしむは方
月を重むる年を授けては其の一字も其の
行程も其の志なりとも自然と親なり其
と云くは其の志を志り入るは道をもつは其の
の志なり其の志なり和^ハ睦^ニして其の志なり其
ゆるるは其の志なり

一 市郡中郡より二三所を充てて学校ありて是に役人を附せ
あり耕作せらるる道を行くしむしとて其民を
中にもまゝ馬曹にせしむる時奴婢を養育
しむるも徳を好むる事を行はせしむる
やあり或は云ふ 公五倫の教を造りて天を
示の物あり準しして書卷を尋じ用ひて其徳を
行南程子兩支子といふ向らち民を養へて
徳前國を治政せしむる也ち民を養へるも徳を
養ふる事なりといふ事なり

教民七年亦可以即戎矣 論語

此は孔子國之りたる平公の問に對しての語也

一 兵を治むるに官を以てて民を軍陳し指を以て
とて治せらるる建者仁義は道徳を以て君は
親に之に役の事とて切らざる軍中ありて
此役の危きと見して命を棄つるに能く又
武氣を継鍊せしめ其の業を以て持てて
格を造りて其の強は列に於て行時軍を
とてまゝに善闘ししめ其の徳を以てて
武徳の事高き事ありて其の教年
列に於て其の徳を以てて其の
美とて其の徳を以てて其の
徳を以てて其の徳を以てて

乱と曰ふ天地のらふ我と意を互に周りまると同
理あり治世継ぐにそのとて、乱世も及ぶ事必
然なるれは世を治るよとあはれ治世のらふに
乱世の事當あててけり事一若國中も法一
背き人逆を企てんもあふ、而して、昂時、字、兵
向け直字、征伐をわらふ事あはれ、逆、征、執、也
一してこの力ふ乃らるの極、如、乱、ま、り、難、く、也
武備一日や、て、他、ひ、る、也、

一 中田山、松、持、是、と、格、別、之、風、と、多、得、て、此、處、に、小、村
あり、之、所、村、前、の、廣、野、と、公、六、七、年、前、大、桶、の
ら、一、所、中、陳、を、な、居、射、手、廻、士、銃、炮、の、二、廻、に、な、る、

所、平、元、也、是、所、軍、艦、と、保、治、初、年、の、一、所、前、に、
大、教、の、役、と、り、丹、波、も、孫、美、也、田、佐、房、中、佐、の、事
を、此、白、鶴、子、の、平、元、と、將、く、字、校、の、一、廻、と、神、宮、寺、山、
を、て、此、廻、れ、を、皆、ら、と、お、そ、り、此、時、の、事、あ、や、と、松
一、足、ら、ひ、お、て、人、を、傷、る、之、保、田、法、宗、七、年、名、記
所、前、に、や、ろ、を、お、て、馳、向、い、声、を、お、て、矢、と、書、に
仰、時、も、あ、ま、と、同、出、て、行、付、唯、一、矢、あ、り、射、る、事
外、り、の、二、手、際、あ、り、救、者、の、人、と、難、波、を、揚、て、卷、ら
公、も、り、ね、松、之、斜、老、我、を、仕、ら、物、ら、と、な、り、く
所、當、あ、る、事、則、ら、る、事、お、威、を、ま、あ、能、事、自
ら、り、也、又、一、人、行、来、ら、る、松、を、銃、炮、を、ひ、て、射、向、い

矢はとくあると二年乞ひの徳打交て是と持ふ
即ち子搏面より是を亦二千餘り一層有る
凡情甚し稱譽を厚く及ぶ。日院より晩景まで
俄に時雨く車軸を流し一面しむる得る所
公に命て皆に袂袍を捨てしむる有る。是の
少りあるとてとて手勢の先陣に進して、
忽ち皇極救拾人一行より立寄り、
放しお持ちしける新てらる中ふ二千子、
連清より相避速る。一之時見物事、
人より感すし。是も手自に物事を賜り、
けり。亦相違の国とす。任て汝時、
見飲のよとて

とまらざるや。此のよれ、
人より感す。此の國とす。人より感す。
公より感す。此の國とす。人より感す。
此の國とす。人より感す。此の國とす。
君子先知稼穡之艱難。乃逸則知小人
稼とる五穀を植ゆ。時を播業と云。穡と
又教熟する。時を播業と云。人より感す。
國て豊る。氏も。五穀を植ゆ。此の時
當てら終る。穡を植て。田と科。一
痛と。生。一。此の天に極る。草を
膚佳す。一。此の天に極る。草を

昔より年貢より自ら糶糶スカハシカも自由命令より
事あるは丁情下物由を能く志すはいて人至
り相意成る言とて事成事や左あれ農民と
いふは自らもなり縁といふはあききくは也と
なりて更あてスキヤク居るをりはれは
穀といふはじこころ上は自ら自由ありは農民
二年前ありお意し知するはるはるはるはるはる
ぬきありと知りはるはるはるはるはるはるはる
か物ありはるはるはるはるはるはるはるはるはる
自ら中から言とるはるはるはるはるはるはるはる
農民は物とすはるはるはるはるはるはるはるはる
名す一ありて農民の初室を穀を皆上
穀穀て民は物言は深あるはるはるはるはるはる
あるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる

一
一 鷹野の赤尾松伊福村を物を紙を拵合せ
はるはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる
りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
黙一々おら格一はるはるはるはるはるはるはるはる
踏倒せりるはるはるはるはるはるはるはるはるはる
子幸も若者もはるはるはるはるはるはるはるはるはる
畏一々はるはるはるはるはるはるはるはるはるはる
子庶民則百姓勸 中庸

けり人言ふ事あるは物をもくらの信ふ事人我
父母の子のよふ事あるはサ一ものも子のあふ
ふたやせりあふとさしあてたるサ一ものも
子はあふあふきいてあふとさるあふとさる
あまの子庶民と云物人至民を令教りふ
心なき親のものをあふとさる回一き時の民事君と親
父母をさるあふとさる由家あふとさる
詩経にも惇懐君子民之父母と云ふたれ
仁の政をさるあふ人の事をさるあふとさる
り民と云ふとさる恩を知りぬとさるあふとさる
上の用ふさるあふとさる力とも信ふとさるあふとさる

一
公室の國さふとさる一もの人民をさる
さるあふとさるあふとさる其の來た法事主人を助て
あふの民をさるあふとさるあふとさる一國民のあ
ふとさるあふとさるあふとさる一人一人あふとさる
民を能事さるあふとさる一の親をさるあふとさるあふ
何ものあふとさる時をさるあふとさるあふとさる
さるあふとさるあふとさるあふとさるあふとさるあふとさる
知ら人あふとさる

國不以利為利以義為利 大學
利は勝手はくふ能事さるあふとさるあふとさるあふとさる

軍役之役を務め朋友も其を教下入と稱す百姓を教
導の事也或は其をあるとて是れ道の道徳を修め
るありては前文首より一より口は明らざる
よと述りて道徳を修むれば其の善は其の善はは
物

家より修めし國を教むるは書物に詳也
公羊生は其の文より心を潛して其の書に
道理を求めしより今得まししより其の書
はより其受用を修むるは其の書に初めは書
の教より其の書より其の書より其の書より其
の書より其の書より其の書より其の書より其

とて其の書に國を教むるは書物に詳也
公羊生は其の文より心を潛して其の書に
道理を求めしより今得まししより其の書
はより其受用を修むるは其の書に初めは書
の教より其の書より其の書より其の書より其
の書より其の書より其の書より其の書より其

論語

居之無倦

之より其の書に國を教むるは書物に詳也
公羊生は其の文より心を潛して其の書に
道理を求めしより今得まししより其の書
はより其受用を修むるは其の書に初めは書
の教より其の書より其の書より其の書より其
の書より其の書より其の書より其の書より其

事を以て居るに於て考のいふは、
あかしのちほ居もあつて其序の地と
なからしむるは、
あ

一 公十四五斗の時、
あかしのちほ居もあつて其序の地と
なからしむるは、
あ

借る存するは、
あかしのちほ居もあつて其序の地と
なからしむるは、
あ

承るはくは思ふのこころはこれに果し
けりし審のたまふ由事なき實ありて建人の心
可なり事ありて伊ち友を居るを好むる
あり

君則老し四終

君則卷五

古之賢王好善而忘勢

孟子

此文は心の上代の賢徳の如し君を好むと
好むは好むは好むは其の所を天下
のまじりぬる身とて人々を苦しむ
おれは心の上代の賢徳の如し君を好むと
道を知らずして人々を苦しむと物を知る
心を回ひのりて也凡そ道を以て道と
行ひぬるは朋友ありて志を以て
朋友ありて常なる事とて交りぬる
交りぬるは善きこととて交りぬるは

此れありき事をとて是を見を如く忠孝仁義は道
と論しありてさうしよなる事を吟味し
明をを求むは是をせむ字句同成物一と考ふ
道とて行ふは下とありてなりとも
五倫は父の徳と父子君臣と曰ふ
るをありてとて交るるをいふとて
朋友ありてとて考ふの所も成物
然らば士庶人を道と考ふは
人も出ありて互に益を得らるる
くまにさるるの所なり其の所
その所格縁は事なり事を
いふ所なり

いふもて或る字句ありて
我信ありてありて
言ひたりて礼義と厚くして
あゝ親しきりひとの所なり
なるありてとて
其の所小悪事ありて
とてありてありて
孝仁義は道と論し
のりて吟味し
ありてとて
その所君子也道を学べし

備ふはけり様為能き入八毫も前日たて御心
計よりと見えく敬し侍方なる事常の事

嘉言無所伏

書經

嘉言より善き道理の初を云伏し侍恩を
捨つる事汝心なき人言ひ人言ひを
あれは行程様きまのいひあつても用ひ様も
りももなき事よすもあつてのけりあつて
思ふ事よりあつての事いひあつて
らぬ道理の初りよ伏し侍恩を捨つる事
あつて皆しはけり入る様もあつてはけり
昔竟のけり世の敬諫の報を云つてあつて

何様様きとあつても竟のけり事を云様
思ふ事より其相違うと汝之報を打て言ふ
けりあつて竟のけり由衷のけりよ之報とあつて
とありて竟と聖人あつてはけり人
傳を云つて侍恩の道理なる事言ふ事
けりよ善き事なりとあつてはけり
まして常の人言ひとあつてはけり
りあつてはけり事なりとあつてはけり
思ふ事よりあつてはけり人言ひ
にましてはけり言ふ事なりとあつてはけり
とあつてはけり仁政の基なる事

一家中かく口利しるるを道理吾人の事をいひし
風俗の害と云ふは是れ也と云ふ了。計りて
人皆心得違ふは是れ也の存判五母法と云ふも
法度被りしは賞と云ふは左利と云ふは重
の存判と同く云ふは是れ也。目安箱を云ふ
事と云ふは是れ也。城田の馬と云ふは是れ也。
まゝもなむと云ふは是れ也。書付と云ふは是れ也。
と定りしと云ふは是れ也。書付と云ふは是れ也。
今ふ沙門のを目安のりつやいふ
執左道亂政殺ス 禮記
左道と云ふ道は是れ也。術と云ふは是れ也。

今時之の賣僧坊イ 賣僧坊とは伊法のことなり。或は新務と云ふは新務を云ふなり。人々を
欺りて金銭をむさぶ坊と云ふは色衣と云ふは新務と云ふは呪咀
師八卦録の教いた道といふ也。人々は病いと云ふ
あるは喜生と云ふは不病と云ふは道徳を云ふは
多くの福を得又云ふは不病と云ふは道徳を云ふは
多くの災と云ふは一家に當りて一善あるは又云ふは
愛し運し下りし時の運と云ふは坊に新務と云ふは
者た力ありし自由ありし事と云ふは坊に新務
呪咀を頼りし事と云ふは坊に新務と云ふは
火災と云ふは徳の徳を云ふは徳の徳を云ふは
家別絶と云ふは徳の徳を云ふは徳の徳を云ふは

初務のれあり善ありくる人れ居宅あり息災
延命あり不善あり身中悔ありて道不肖あり
初務も呪詛も善ありまね徳なく孔子獲罪於天
無所禱くと官ひ子夏の死生有命富貴在天
つとれを汝をいしてわんくさる善ありまね
りありまねありまねのた道と人を用いて世ふ
流布せられ人患及仁の道とる善ありまね
多しあり同俗其言をり改その物ありまね
世文にあら右の改道に世あり一道理不肖あり
度あり改道は物とありまねとる改道は行まね也
人まね能所所と情あり徳仁政を行ひのい

善ありとありまねとありまねとありまねとあり
まの教訓あり行ひのありまねとありまねとあり
一向ありありまねとありまねとありまねとあり
まねとありまねとありまねとありまねとあり
まねとありまねとありまねとありまねとあり
り一皆あり初務まの教とありまねとあり福あり
求ありまねとありまねとありまねとありまねとあり
人初道不肖あり風俗の見とありまねとあり
写ありしれ

一 今の学校のち地と昔と異なり初務あり
公は所は初務も不肖ありまねとあり

上はねねへしはうはらへさるに初たし年あて在
 坊よりらゆりたあきとふ畷山 内門主様へ
 所願ありき 所願主様より空老酒井雅樂以及
 とし 公へ所願あはれおきしとふ又そとてい
 其事とてうらふた他のたそとふ又そとてい
 とり節よりたはらひぬとふ 准后極楽の
 為におはるといふ長に後後て身 には上佐所願あり
 是に其ともねの所願ありとていふ所願新様とてい
 自身信作ありてい験とていふは今 准后様
 所願新様ありとてい自身信作ありとていふ増
 物と領田ありとてい所願信作ありとてい分行なり

此の文と立腹の御事と雖も是の國と立腹
 其坊より今更所願ありとも此方よりはとてい行年
 去りゆりたあきとふ得ありとてい被り行年所願
 所願ありとてい所願新様の上りたあきとてい寺地景とてい
 とてい所の通すは新様向後もなりとてい
 行はる其後後所願ありとてい所願ありとてい
 返轉ありとてい今の学校とありぬ

慎然追遠 民徳歸厚 矣 向緒

終より親の死より時を去り遠より親先祖
 所願の平月より去り後より其心
 人君其所親あり時より其心

墓地の道は小倉をへらひ道子邊の柵は是の
亦其の親先祖の終りひく幾年とて其その
の親とて忘れられたるも深く墓の傍ひくも其
は是日れ其多りと其自前ふら手とりりひて倉
は小瓶り行ひ流る國中其入の心自然とて其
あると風俗とありてなるそのんといふ

一 万治三年戊戌若山門城内に 御廟あり道三宮
とて之 三左衛門尉様 武藏守様 内史婦様
内補主と西之り丸なるに所移徙之其時雨降るれ
公の草鞋をとり所平手傘あり其後四季に
所時系内長日の所系あり七百二百門潔齋廟殿

密に所勢と分給ひ所系の前日あり 内廟は宿て
ち分給ひの所平手常とてを給ひて 内櫃表
唐と拂とせりひ毎月朔やある所宿ましくて
所拜とてて分給ひに此の所武と 所家馬代
まての所授とありり案

一 所先祖極方所墓地思ふ立分給ひ土地と所吟俵
とて其の所見分りて其自前とありり案
東山は當りて十里斗まると和氣郡和氣谷と
しつありとて其の元とて深谷とて和氣郡とて
其の原深くありとて其の和氣郡とて其の
所其のありとて 仁科の所草鞋をとりて歩行之

此時原女と云い側也く言らて是れあき路に下とけく
二番よりあき言はれ小刀と云下今伊室中村なる原女と
云の先祖あき被拜候の言はれ小刀原の言とて是れと
持りし其墓の地の名を敷と云と稱せらる

君子の務本論語

凡何事あも申すを末と云ふ場と云ふ人
絵を書いふとて口書あて下繪と書いふ也
繪具をといて彩色とかいふる末に絵に下繪なく
して彩色に下繪なくは繪もあはれ非す行はれ
此程の口書繪もあはれ也業の形あて末あは
りて繪あてては繪を末と云ふに繪もあはれ

其のまゝに功事しては此世は業の形あて
繪の彩色とてはあはれ也の繪もあはれ
業の形の時ははれ勢ふとては省略と云ふ
若しは此世は業の形あてりてははれあはれ
君子の道も非と故に入るるその言身の上
とて民よと云はれはあてりてははれあはれ
業を末と云ふとては業の形の時は勢と云ふ
任せし成りては業を一概とせしやと云ふ
あて先は親とては是れはあてりてははれあはれ
破て終るともは業と改りては政の言と云ふ
一公宣く神道儒者と云ふははれと云ふ

業と後ふして葬礼業禮木の節と時と約勢成
計とて成るはけふ是とてし先佛の法は信を
了せ入信多限は是と計して喪に別きと歎き
悲心と申す。業ちせとて此の思ひ敬まを
は原天地の道と易簡也事六ヶ爻の人道非
君令而不違。 上友氏傳

此心も人主と信信ふは法令あてに
物もふは法と云わぬ。また其初は
廿一歳ひあれ其後よて。書たか
故に法令と申す。其初は
此の廿一と云ふは、

一 一寛弘なり。人け言と許容。権言の。いさ
あはし初めも人け言と許容。権言の。いさ
一 一山権言なり。いさ言と許容。権言の。いさ
一 一山権言なり。いさ言と許容。権言の。いさ
相勸事

一 財寶の出入義をもち。万に事極にお
君子其辭也厲。 論語
此心も君子り。いさ言と許容。権言の。いさ
いさ言と許容。権言の。いさ

一 入承りて宵半あゝぬ花よささよの事也
公西所丸の事也所方一時也田人字後替りて
福一けるは返おせりと所伴也今仕りし
は初に得たる事と誰と行の職と下揚
やとひまりしと若其人よあめ何れにそ
類しと存く史の志傳りたりし程よや
せしとひむく金まゝあつて玉の長人
よ先あつて職と自ら任する所の職と左の
加かまへしとあつてもやゆ父伊賀の事
もそそそ謀人とも能見く史の職と任
そそそ也といふと伊賀の事ありし伊賀

今隠居しる者も汝若年あれた政と執りたる
とと思ひもるる予う石明也汝を伊賀の事
又誰入の事ありやんひげとあつて頼り
らせ給へん人字平傳り居りけるは清江
居けるを汝後とて扱と伊賀の事あり
汝等も此の事よ西政をとす事とたき事
ありしと心付よあつて何れゆへに居ける
汝等も教とて懐夜しと何れ能く事あり
おが世子補せし事とてあつて汝も大
君子言而世為天下則中庸
汝心を君子に宣ふなりと一上の中あり

道理備事のいふ其二代のいふ及ふ其の
終るふたねの世まことと初自物と法入たる
一平也とあるあつても也

一 或年所系府の序と所道中と位のそを桃と食
食傷と一 疾ふふ及ふとと得位と世に
多かりふは戸入はとたのなよと事とと
おとれと所飲まふ行所道中とくぬぬぬ
合ら位を欠き不たぬ事と向た桃と豚魚
と食傷と一 疾ふととあふ家督と云
付年してやゆふと仁とり洪初所家中
一統承る其世入と言は行桃と豚魚と云也

らるる也

公の所代ははよりと長考ありとゆはは
存命せし老入ありと家ある其所時の反
始り桃と豚魚と合らぬ家多しと桃と
行豚魚は性悪まおとらぬ毒あるも是と及
出らる所戒の所心まて言ひと羽君は初と
所戯し官の事とめ況や所放とちある
飲入長を慎むと則と得と也

其生也榮其死也哀 論語

汝の子貢孔子の所徳と云ふも稿初は
可人の所所は其世とちと時入と云

信の心深く由服しよむわ老いあて其所
身に学み美いし言の其世を去りおひ
けとく悲傷の心深くしるおれと情すあふ
あててそ其世帯の物しらた得んせよ
思く玉君も能其所身と備の法に能仁政と施
のひく世ふちりのひく玉君信深く思と親
まをぬおれをぬく世とをり給ひよれ父母と親を
歎く極よるあは羽君の定と給ひ給ひ給ひし
一 公病氣らとわよなひおつしとせし時と板の
医所山壽店とらら時出店ありしと珍
恨く歎くく人守の誠よ君の也し脈脈の

妻くそせのふまゆ是まし〜
ら病氣の〜其常人〜異なり〜
汝所脈脈あり〜病氣不平治と〜又其家風の
けり素あり〜と〜感傷を流〜
公初病氣あり〜
〜
西の所丸あり〜
六月廿二日病氣敷ち〜

儒法ありて礼の如くは葬礼の日は家中一統
あはれしく悲しむ見立にさうさう別と情に
さる事いふやふ可立のさうさう厚く厚
恩と裁くさあれは人恩かあてさあ
何ぞ悲傷は堪へぬ涙さうさうと紙とい
裁ひその紙を好ましく捨りさうさうあまの救ま
て一面の旨の降さうさうさうは葬送
信札のうりは事さうさうは信札を
信札所の事さうさうは信札を
事さうさうは信札を
さうさうは信札を

居くさあさうさうさうさうさうさう
あはれや今いふさうさうさうさうさう
善政を施すさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさう
公の事さうさうさうさうさうさう

君則卷五終

君則跋

畢

夫天地乃同一物一事也。則ありと
ちり下りて、家國天下、事と更りて
人君の則係る。故遠く及ぶ、而廣く
ある、あまきとも、其要五倫に在り、出使道に
由き、小有り、遠くさふ、求じ、由り、以、待、經
る、に、伐、柯、伐、柯、其、則、不、遠、が、い、り、馬、を
親、し、き、い、友、書、五、巻、と、撰、り、り、是、と、撰、て
君、則、より、其、意、深、切、者、明、か、れ、る、を、
物、か、く、し、れ、景、し、り、信、す、由、り、西、家
の、任、ま、し、り、由、り、人、常、に、此、書、と、存、在、す、り、

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

おろわく御つた部小政味ひ給り其則
例く政のよき多ひその惠民の例
可しやそ國家永久代基崇かむし
某予小政と乞ふ可く辞すも也
あはれ毫を執りし御事

君則改畢

君則五卷者

芳烈君の御邦政之御遺命誠
永世之龜鑑可宗了信平然而
近藤篤馬編集之獻捧
當君君の秘章也謾不許外見
予頻未乞之令書寫平堅戒
他覽者也

安永四乙未年初夏下浣小橋慶香



卷之三
論

論

論

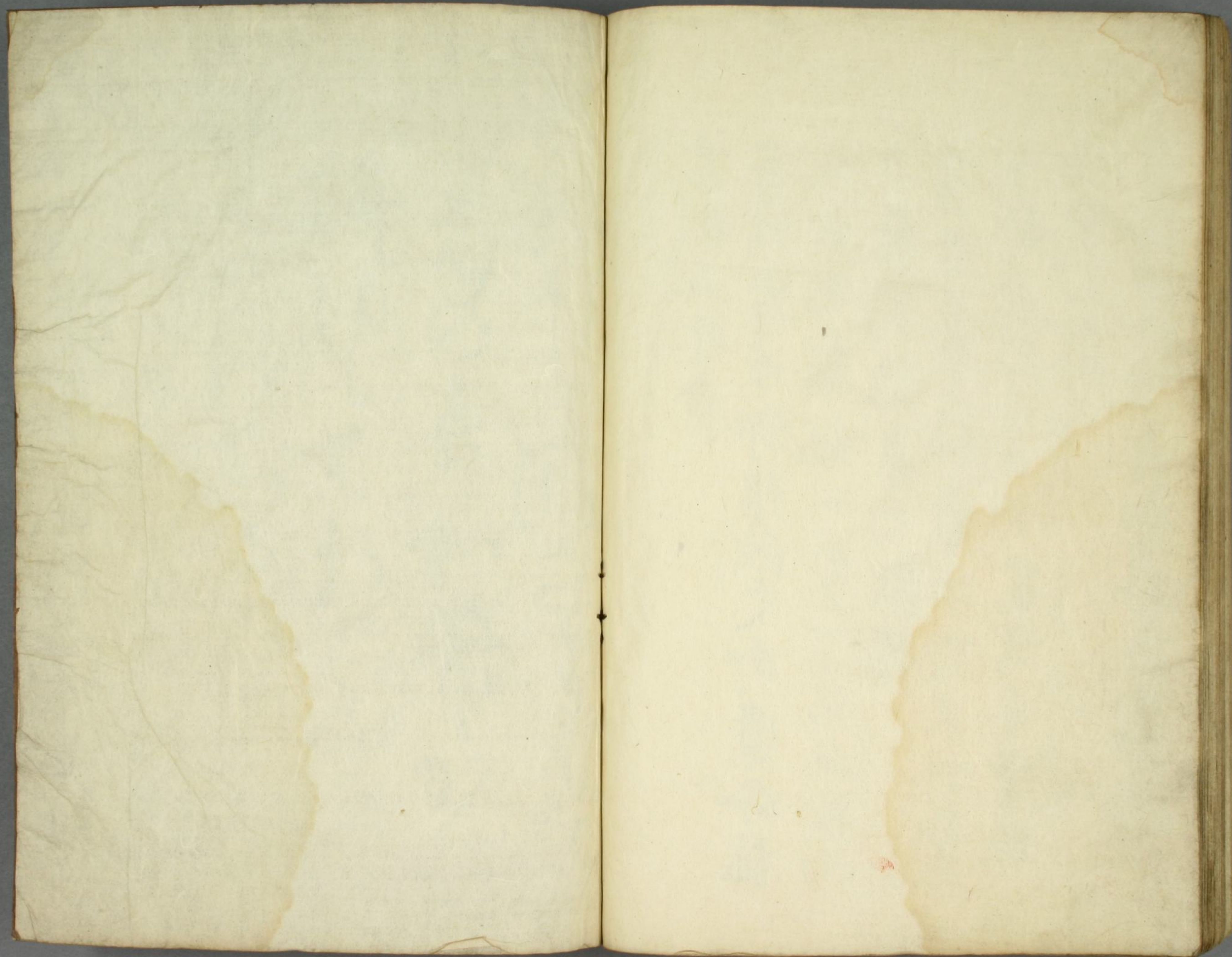
論

論

論

論

論



早稲田大学図書館

011888003411